Osaka University Knowledge Archive

Title	タテ［縦］・ヨコ［横］とその周辺
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2004, 86, p. 9-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69071
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

タテ［縦］・ヨコ［横］とその周辺

蜂矢真郷

現代語においてタテ［縦］・ヨコ［横］がそれぞれ何を表すかについては、國廣哲彌氏編『ことばの意味3　辞書に書いてないこと』[1]の「タテ・ヨコ」[2]、岩野靖則氏(一)「タテ・ヨコの基本的意義」[3]、久島茂氏『〈物〉と〈場所〉の対立　知覚語彙の意味体系』[4]が述べられ、また、上代～近世のタテ［縦］・ヨコ［横］について、岩野氏(二)「タテ・ヨコの成立」[5]が述べられる。本稿は、それら、とりわけ岩野氏(二)をも参照しつつ、上代・中古を中心とするタテ［縦］・ヨコ［横］およびその周辺の語について見ることにしたい。

一

初めにタテの例を挙げるが、タテ［楯］とタテ［縦］とがある。

タテ［楯］　……木幡の道に逢はしし嬢子（をとめ）後手（うしろで）は小楯（をだて）ろかも〈袁陁弖呂迦母〉歯並（はな）みは椎菱（しひひし）なす……（記応神・四二）

タテ［縦］　天の衣と經緯（たてぬき）有（こと）无し（石山寺蔵大智度論天慶元年点[6]・大坪併治氏釈文）

タテ［楯］（記応神・四二）の例は、乙女（歌謡の前の本文によるならば「矢河枝比賣」）の形容で、「後ろ姿はまっすぐで、楯のようだ。」（土橋寛氏『古代歌謡全注釈古事記編』[7]）のような意であり、タテは楯の意に用いられている。

タテ［縦］（石山寺蔵大智度論天慶元年点）の例について、大坪氏は「天の衣と」とされていて、[8]本来「天の衣に」とあるべき箇所かと見られる。また、この例には「經緯（たてぬき）」とあって、タテとヌキとが対義的に用いられる例であり、タテ［経］は織糸の縦糸を、ヌキ［緯］は織糸の横糸を表すが、タテ［経］はタテ［縦］の一種ととらえられる。

ヌキ［緯］「機（略）説文云　緯（略）和名沼岐　謂―［緯］則経可知横織絲也」（和名抄・廿巻本十四）は、『時代別国語大辞典上代編』（以下『上代編』と示す）に「織糸の横糸。」「【考】貫（ヌ）クの名詞形であろう。（略）」とあるように、ヌク［抜］「大太刀（おほたち）を垂れ佩（はき

立ちて抜かずとも〈農智儒登慕〉末果たしても闘はむとぞ思ふ」（武烈前紀・八九）・［貫］「橘は己が枝々生れゝども玉に貫く時〈陁麻尓農矩騰岐〉同じ緒に貫く〈於野児弘儛農倶〉」（天智紀・一二五）の居体言ととらえられる。すなわち、タテ［経］（織糸の縦糸）に対して、ヌキ［緯］（織糸の横糸）は、縦糸の間にヒ［梭］「杼　通俗文云受(上)緯曰(上)竽今案杼字也　和名比」（和名抄・廿巻本十四）を用いてヌク［抜・貫］ところの横糸であって、それ故にヌキと言うと考えられる。ヌク［抜・貫］は、引き抜く意（［抜］）にも貫く意（［貫］）にも用いられるが、ヌキ［緯］は貫く意に対応すると言える。

一方、タテ［楯・縦］に対して、タタ〜の形で用いられる例もある。タタは被覆形と、タテは露出形と呼ばれる。

タタナミ［盾列］　若帯日子天皇　坐(二)近淡海之志賀高穴穂宮治(二)天下(一)也（略）御陵在(二)沙紀之多他那美(一)也（記成務）　天皇崩　明年秋九月壬辰朔丁酉　葬(二)于倭國狭城盾列陵(一)盾列此云多〻那美（仲哀前紀）

右の「若帯日子天皇」（記成務）および「天皇」（仲哀前紀）は成務天皇を指していて、成務陵がサキノタタナミ［佐紀盾列］にあると記されている。[9] タタナミ［盾列］は、楯が並んでいるさまを表すかと見られる。因みに、「陵」はミサザキと訓まれる。[10]

タタナメテ［枕詞］　楯並めて〈多〻那米弓〉伊那佐の山の木の間よもい行き目守らひ……（記神武・一四）

タタナメテは、「枕詞。楯を並べ連ねて弓を射るの意で、地名の伊那佐・泉ノ川などのイの音にかかる。」（『上代編』）とされる。

タタナミ［盾列］のナミは横に並ぶ意のナム（四段）「…浜も狭に後れ並み居て〈後奈美居而〉…」（萬一七八〇）の連用形と、タタナメテ［枕詞］のナメは横に並べる意のナム（下二段）「…友並めて〈友名目而〉遊ばむものを　馬並めて〈馬名目而〉行かまし里を…」（萬九四八）の連用形と見られるので、これらから[11] タタナム（四段・下二段）が想定される。

タタサ　縦さにも〈多〻佐尓毛〉かにも横さも奴とそ我はありける主の殿戸に（萬四一三二）

タタサマ　縦（略）縮也　毛牟乃木　又太〻佐万（新撰字鏡・享和本）

タタサマ（新撰字鏡・享和本）の例は、モムノキの訓に当たる「縦」字とタタサマの訓に当たる「縦」字とが混同されたものである。タタサ・タタサマについては、第二節に改めて見る。

これら被覆形タタのうち、タタナミ［盾列］・タタナメテ［枕詞］は露出形タテ［楯］に対応し、タタサ・タタサマは露出形タテ［縦］に対応するものである。

二

次に、ヨコ［横］の例を挙げる。

ヨコサラフ［横去］　……百伝ふ角鹿の蟹　横去らふ〈余許佐良布〉何処に至る……（記応神・四二）

モモヅタフは枕詞かと見られる。ツヌガ「〈都奴賀能迦迩〉」は、

現福井県敦賀市に当たる。ツルガ「越前之都魯鹿津」（霊異記・中廿四）・「敦賀都留我」（和名抄・元和古活字本、越前国郡名）ともあり、ツヌガ―ツルガはナ行―ラ行の子音交替と見られる。サラフはサル［去］＋フ（反復・継続）ととらえられて、ヨコサラフは横に去り続ける意と見られる。

ヨコホル　ひんがしのかたに、やまのよこほれるをみて（土左日記）

ヨコホルは、諸説があるが、横に広がる意かと見られ、そのホルは、広いさまを表すホラホラ「鼠来云 内者富良〻〻此四字以音外者須〻夫〻此四字以音」（記神代）とともにとらえられるかと見られる。[12]

ヨコタフ　欲(シテ)以(ニ)琴聲(ヲ)使(テ)悟(レ)於(ニ)天皇(ニ)横(ニ)琴(ヲ)弾(テ)曰（雄略紀十二年十月・前田本）

ヨコタハル［四段］横たはれる松の木高きほどにはあらぬに（源氏物語・藤裏葉）・［下二段］おほきなる木の、風に吹きたうされて、根をさゝげ横たはれふせる（枕草子）

ヨコタフは下二段動詞でよこたえる意であり、ヨコタハルはよこたわる意であるが四段動詞・下二段動詞両方の例が見える。このタフが何であるかは明らかでない。

ヨコヤマ［横山］妹をこそ相見に来しか眉引の横山辺ろの〈与許夜麻敝呂能〉猪鹿なす思へる（萬三五三一・東歌）

ヨコギ［横木］桄与己木 又万久良（新撰字鏡）三五五一笆の縦木には紫壇、横木には沈（宇津保物語・吹上下）

ヨコガミ［軸］軸（略）与己加弥也（新撰字鏡）

ヨコハキ［横佩］伏突与己波支（同）

ヨコヤマ［横山］は、「起伏少なくなだらかに、横に長くつらなった山。」（『上代編』）の意とされる。ヨコギについて、「桄」字（新撰字鏡）は大棗の意であるのでその点ははっきりしないが、横にした木の意と見てよいであろう。宇津保物語の例は、タテギ［縦木］と対義的に用いられている。ヨコガミは、車軸の意とされる。ヨコハキは、太刀の異称で、身体の横に佩くところから横佩きと言うとされる。

ヨコサ　縦さにもかにも横さも〈加尓母与己佐母〉奴とそ我はありける主の殿戸に（萬四一三二）四一五六

ヨコサマ　伊字の三の點の、若(し)並『上白、並ハ横也』（にし）ても則(ち)伊に成(ら)不、縦に（し）ても亦成(ら)不、（石山寺蔵法華経玄賛平安中期点・中田祝夫氏釈文）まろは、目はたゝさまにつき（略）鼻は横さまなりとも（枕草子）

ヨコサ（萬四一三二）四一五六の例は、先にタタサの例として挙げたものでもあり、タタサと対義的に用いられている。タタサ・ヨコサは、縦であるさま、横であるさまを表している。ヨコサマ（石山寺蔵法華経玄賛平安中期点、枕草子）の例は、タタサマと対義的に用いられていて、タタサマ・ヨコサマも、縦であるさま、横であるさまを表している。

三

タテ［縦］・ヨコ［横］についての種々の例をさらに挙げる。

則 隔(一)山河(二)而 分(三)國縣(一) 隨(四)阡陌(一) 以定(五)邑里(一) 因以 東西為(一)日縱(一) 南北為(二)日横(一) 山陽曰(二)影面(かげとも)(一) 山陰曰(三)背面(そとも)(一)（成務紀五年九月）

右の「阡陌」・「日縱」・「日横」の部分に対する、日本書紀の北野本（第三類）・熱田本・守晨本・兼右本・寛文九年板本、日本書紀私記の甲本・丙本、和名類聚抄所引日本紀私記の訓を見ると、

「阡陌」：タヽサマヨコサマノミチ（北野本）、タヽサノミチヨコサノミチ（熱田本、守晨本右訓、兼右本右訓、寛文九年板本右訓）、タチシノミチヨコシノミチ（守晨本左訓、兼右本左訓、寛文九年板本左訓、和名抄所引日本紀私記「多知之乃美知、与古之乃美知」）、他にタヽサノヲ[オ]ホチ（日本書紀私記・丙本「太く左乃乎保知(ママ)」[13]）

「日縱」：ヒノタヽシ（北野本）、ヒタヽシ（熱田本、守晨本、兼右本右訓、寛文九年板本、日本書紀私記・丙本「日太く末之(ママ)」[14]）、ヒノタツシ（兼右本左訓「比乃多都志 養老」、日本書紀私記・甲本）

「日横」：ヒノヨコシ（北野本、兼右本左訓「比乃与己之」、日本書紀私記・甲本）、ヒヨコシ（熱田本「日横(ヨコシ)」、守晨本、兼右本右訓、寛文九年板本、日本書紀私記・丙本「日與古之」）、他に付訓箇所が「日縱」に誤られているがヒノヨキシ（日本書紀私記・甲本）

のようであり、第二節に見たタタサ・タタサマ、ヨコサ・ヨコサマを含めてその他に、タタシ・タツシ・タチシ、ヨコシ・ヨキシの訓が見える。「日縱」に対する兼右本左訓ヒノタツシに「養老」とあるところから見ると、「日縱」はヒノタツシと、「日横」はヒノヨコシと訓むのが本来かとも思われる。

この日本書紀の例において、「日縱」は「東西」を、「日横」は「南北」を、「影面」は「山陽」すなわち南を、「背面」は「山陰」すなわち北を指していることが注意される。また、カゲトモ［影面］はカゲ［光］＋ツ（連体）＋オモ［面］の約、ソトモ［背面］はソ［背］＋ツ（連体）＋オモ［面］の約ととらえられる。[15]

……大和の青香具山は 日の経(たて)の〈日経乃〉大き御門に 春山としみさび立てり 畝傍のこの瑞(みづ)山は 日の緯(よこ)の〈日緯能〉大き御門に 瑞山と山さびいます 耳成の青菅山は 背面(そとも)の〈背友乃〉大き御門に 宜しなへ神さび立てり 名ぐはしき吉野の山は 影面(かげとも)の〈影友乃〉大き御門ゆ 雲居にそ遠くありける……（萬五二、藤原宮御井歌）

『校本萬葉集』によると、大矢本の「「經」ノ左ニ「タツシ」アリ。」とあり、同じく温故堂本・大矢本の「「緯」ノ左ニ「ヨクシ」アリ。」とあるが、そのように訓むと字余りになるので、ヒノタテノ・ヒノヨコノと訓んでよいと考えられる。ここにヨクシの訓があることには注意しておきたい。

藤原宮から見て、香具山は東に、畝傍山は西に、耳成山は北に、

吉野山は遠く南に見えるので、この例の「〈日経〉」は東を、「〈日緯〉」は西を、「〈背友〉」は北を、「〈影友〉」は南を指していると見られる。『日本国語大辞典』（初版・第二版とも）ヨコ［横］の項は、「南北の方向に対して、東西の方向。」の意として右の萬葉集五二番歌の例を挙げるが、正しくない（タテ［縦・竪・経］の項では、「東。」の意として挙げている）。

日竪 日横 陰面 背面乃諸国 人乎割移天（高橋氏文）

『上代編』タテ［経・縦］の項の「考」に、「成務紀五年には「以二東西一為二日縦一」とあるが、高橋氏文では「日竪・日横・陰面・背面乃諸国人乎割移天」とあり、この四つで四方を表わすらしく、すなわち第一例（蜂矢注、萬五二）の用法と一致する。成務紀の例も、中国で東西を緯、南北を経というのにならったのであろうが、逆になっている。」とあるように、萬葉集五二番歌の例に倣って、「日竪」は東を、「日横」は西を、「陰面」は南を、「背面」は北を表すようである。「陰面」は北を表すとも考えられるが、「背面」が北を表すかと見られるところからすると、「陰面」は南を表すと見る方がよいであろう。「影面」（成務紀五年九月）・「〈影友〉」（萬五二）が南を表しており、「陰面」もともにカゲトモと訓まれるので南を表すということになる。

また、右の『上代編』の指摘のように、「経」は南北、「緯」は東西を表すのが本来であって、日本書紀成務天皇五年条で、「日縦」が「東西」を、「日横」が「南北」を指しているのには、問題があると言える。[16] さらに、「〈日経〉」（萬五二）・「日竪」（高橋氏文）が東を、「〈日緯〉」（萬五二）・「日横」（高橋氏文）が西を表すのも、本来とずれがあることになる。

さて、これまでに挙げていないものに、

タタシマ　衡従ヨコシマ タタシマ（名義抄）

ヨコシマ　河水横逝、以流末、不駃。聊、逢霖雨、海潮、逆上而巷里、乗船、道路、亦泥。故、羣臣、共視之決横源而通海塞逆流以全田宅。（仁徳紀十一年四月・前田本）

がある。タタシマ（名義抄）の例は、ヨコシマタタシマ・ヨコサマタタサマ両訓の例である。タタシマ・ヨコシマは、タタサマ・ヨコサマと同様の意と見られる。

ここに、サ・シ、および、マはいずれも接尾辞と見て、タタサはタタ＋サの、タタシはタタ＋シの構成と、タタサマはタタサ＋マ（［タタ＋サ］＋マ）の、タタシマはタタシ＋マ（［タタ＋シ］＋マ）の構成ととらえられ、タツシ・タチシはとりあえずタタシの母音交替と見られて、また、ヨコサはヨコ＋サの、ヨコシはヨコ＋シの構成と、ヨコサマはヨコサ＋マ（［ヨコ＋サ］＋マ）の、ヨコシマはヨコシ＋マ（［ヨコ＋シ］＋マ）の構成ととらえられ、ヨクシ・ヨキシはとりあえずヨコシの母音交替と見られる。

四

ここで、タタサマ・ヨコサマ、タタシマ・ヨコシマのような～サマ・～シマの形のものについて、今少し検討することにしたい。

～サマ・～シマ両形を持つものに、他に次のようなものがある。

サカサマ　さかさまに年もゆかなむとりもあへずすぐるよは

ひやともにかへると（古今八九六）―サカシマ　太子行

(一)暴虐(アラクサカシマナルワザシテ)(安康前紀・図書寮本)

カクサマ　世間(よのなか)の常(つね)の理(ことわり)かくさまに〈可久左麻尓〉なり来(き)

にけらしすゑし種(たね)から（萬三七六一）―カクシマ　父我加

久斯麻尓在止念弖於母夫気教祁牟事（三七八三）（一三詔・続紀天平勝宝元年）

コトサマ　むかし、をとこ、ねむごろにいひちぎりける女の、

ことさまになりにければ（伊勢物語）―コトシマ　供奉政

乃趣異志麻尓在尓（六四詔・正倉院文書・天平勝宝九年）

アカラサマ　努(ユメ)〻力(ツトメ)〻。急(アカラサマニ)須(スベカラク)應(ベシ)斬。（皇極紀四年六月・

岩崎本平安中期点）―アカラシマ　自(ニ)火(ホノホノ)炎中(ノ)、白狗

暴(アカラシマニ)出(テオフ)逐(ニ)大樹臣(ヲ)。(一)（雄略紀十三年八月・前田本）[17]

これら、～サマと～シマとは、基本的に同様の意と見られる。

さて、これら～サマ・～シマに対して、サカサを別にすると、カクサ・コトサ・アカラサの例は見当たらず、サカシ・カクシ・コトシ・アカラシの例も見当たらない。[18] このことは、タタサマ・ヨコサマ、タタシマ・ヨコシマに対してタタサ・ヨコサの例もタタシ・ヨコシの例も見えることと異なっていると言わなければならない。そして、別にしたサカサも、その例は「SAKASA サカサ Coll. for *sakasama*.」（和英語林集成・第三版）のように大きく下る（「Coll.」〔口語、Colloquial〕とあることが注意され、サカサマの略かと見られる）ものであって、上代・中古において見るならば、サカサの例は見当たらないことになる。

先に、第三節でタタサマ・ヨコサマはタタサ＋マ、ヨコサ＋マの構成と、タタシマ・ヨコシマはタタシ＋マ、ヨコシ＋マの構成ととらえられると述べたが、これは、タタサ・ヨコサの例もタタシ・ヨコシの例も見えるのでそのようにとらえることができたのであって、右に挙げた～サマ・～シマについては～サ＋マ、～シ＋マの構成ととらえることはできないことになる。

それでは、これらの構成はどのように考えればよいか。サカ＋サマ、カク＋サマ、コト＋サマ、アカラ＋サマ、および、サカ＋シマ、カク＋シマ、コト＋シマ、アカラ＋シマととらえる、[19] すなわち、これらのサマをサ＋マの肥大した接尾辞と、これらのシマをシ＋マの肥大した接尾辞ととらえるのがよいということになる。

肥大した接尾辞サマの例を他に挙げることができる。

イカサマ　……いかさまに〈何方尓〉思ほしめせか……（萬一六七）　いでや、いかさまになすべき（宇津保物語・菊の宴）

カリサマ　泛尓命孰常恃之〈泛尓加利佐万奈留　孰誰也〉（霊異記・下序・真福寺本）

がそれである。このうち、イカサマはニを伴いどのようにの意に用いられていて、偽物などの意の名詞イカサマはこの時代には見えない。[20] これらは、イカサ・カリサの例が見当たらないところから見て、イカ＋サマ、カリ＋サマの構成と見られる。[21]

アリサマ　いへにいたりて、門にいるに、つきあかければ、いとよくありさまみゆ（土左日記）

アリサの例が見当たらず、アリサマはアリ＋サマの構成と見られるが、[22] サマはさらに名詞サマ「その山のさま、高くうるはし」（竹取物語）としても用いられて、アリサマ（土左日記）は、名詞として用いられているので、アリ＋名詞サマの構成と見る方がよいであろう。

ただ、肥大した接尾辞シマの例は、他に挙げることができないようである。とすると、〜＋シマの例は、〜＋サマの例に包摂されることになるので、〜＋シマの例は〜＋サマの例からの類推によって形成されたと見る方がよいとも考えられる。

ところで、カス型動詞に本来型（〜ク＋ス）と応用型（〜＋カス）とがあり、[23] ヤカ型語幹に本来型（〜ヤ＋カ）と応用型（〜＋ヤカ）とがあった。[24] ここに、これらと同様に、〜サ＋マ、〜シ＋マの構成のものを本来型と、〜＋サマ、〜＋シマの構成のものを応用型と呼ぶことができよう。ただ、カス型動詞の応用型においては、〜＋スの例を持つ代入型とそれを持たない直接型とがあり、ヤカ型語幹のそれにおいては、〜＋カの例を持つ肥大的代入型とそれを持たない直接型などがあったが、〜サマ・〜シマには〜＋マの例が見当たらないので、そのような分類はできない、ないし、応用型の全てが直接型である、と言える。

五

ヨコ［横］は、タテ［縦］の対義語として横の意に用いられるが、それとはやや異なり、正しくない意に用いられる例もある。『金剛般若経集験記古訓考証稿』[25]（辻星児氏担当部分）は、ヨコス［讒］（後掲）について述べられる中で、以下のヨコシ・ヨコメ［横目］・ヨコタブ［訛］の他のヨコ〜の例を挙げられる。

ヨコサマ　横サマに毀誘を生ぜり。（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春日政治氏釈文）

ヨコシ　裂（略）不正也　子呼父之稱　与己之（新撰字鏡）

ヨコシマ　匿（略）ヨコシマ　穢也　耶也（邪）（名義抄）

ヨコス［讒］　報(二)王崇一(一)　真如所(レ)告　此是延命大吉（石山寺蔵金剛波若経集験記平安初期点）　讒（略）毀也　与己須又不久也久（新撰字鏡）　……誰か誰か　この事を　親に　まうよこし申しゝ〈末宇与己之末宇之ゝ〉……（催馬楽三〇・葦垣）

ヨコメ［横目］　盻（略）邪見也　恨見也　与己目尓三留　又弥良弥（尓）（新撰字鏡）

ヨココト［横辞］　垣ほなす人の横言〈人之横辞〉繁みかも逢はぬ日まねく月の経ぬらむ……（萬一七九三）

ヨコナマル[26]［訛］　方到(二)難波之碕(一)　會(下)有(二)奔潮(一)太急(上)　因以　名(二)浪速國(一)　亦曰(二)浪花(一)　今謂(二)難波(一)訛也（訛此云与許奈磨盧）（神武前紀）

ヨコナマルのナマル［訛］は、やや時代が下るが「ゐたりける所のきたのかたにこゑなまりたる人の物いひけるをききて」（金葉二度本六四八詞書）のように用いられる。

ヨコナバル［訛］　爰新羅の人、恒愛京城傍耳成山。畝傍山。則到琴引坂顧之曰、宇泥咩巴椰彌〻巴椰。是、未習風俗之言語。故訛畝傍山謂宇泥咩訛耳成山謂瀰〻耳。（允恭紀四十二年十一月・図書寮本）

ヨコナバス［訛］　故ニ口ヲ喎メテ音ヲ横ヘ乞食ノ音ヲ學ブ（今昔物語集・十四28）

ヨコナマルとヨコナバルとは、マ行―バ行の子音交替と見られる。また、ヨコナバスは、ヨコナバルの他動詞化ととらえられる。

ヨコタバル［訛］　訛（略）タガフ　カサル　アヤマレリ　イツハル　ヒナフ　ウゴカス　ヨコタハル　カマヒスシ（略）（名義抄）

ヨコタブ［訛］　さらにくちをゆがめこゑをよこたべて經をまねびてよむ（三宝絵詞・中九・東大寺切）

ヨコタバル（名義抄）の例は、ヨコタバル・ヨコナバル両訓の例である。ヨコタバルのタバルは、タブ［訛］「うぐひすはゐなかの谷のすなれどもたびたるねをばなかぬなりけり」（山家集九九二）とともにとらえられる。また、ヨコナバス（今昔物語集）の例とヨコタブ（三宝絵詞）の例とは同話であり、[27] ヨコタブはヨコタバルの他動詞化ととらえられる。

これらの中で、現代で最もよく用いられるのはヨコシマであろう。第二・三節において、〜サマと〜シマとは基本的に同様の意と見る方向で述べてきたが、ヨコサマに対してヨコシマの方が正しくない意に偏る可能性はあろう。そして、サカサマとサカシマ、アカラサマとアカラシマについても後者がマイナスの意に偏る可能性がないではなく、〜サマと〜シマとはそのように分化して行ったととらえることもある程度はできそうである。

六

実は、タテ［縦］はタツ［立］とともに、また、ヨコ［横］はヨク［避］とともにとらえられる。『上代編』ヨコ［横・緯］の項の「考」に「なお、避クはおそらく横と同根、」とあり、『岩波古語辞典』タテ［縦・竪・経］の項に「タテ（立）と同根」と、同ヨコ［横］の項に「ヨキ（避）と同根。」とある。

タツ［立］〔四段〕　さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて〈本那迦迩多知弖〉問ひし君はも（記景行・二四）・［立・建］〔下二段〕　この御酒を醸みけむ人はその鼓臼に立てゝ〈宇須迩多弖〉……（記仲哀・四〇）

ヨク［避］〔上二段〕[28]　家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を〈与久礼杼吾等乎〉濡らさく思へば…」（萬一六九七）

このようにとらえると、第一節に挙げたところのタテ［楯］は、タツ［立］〔下二段〕の居体言であり、立てる物であることが理解される。また、タタはタテ［縦・楯］の被覆形のみならずタツ［立］の被覆形でもあり、また、ヨコ［横］はヨク［避］の被覆

形であると見られる。[29]

先に第三節でタツシ・タチシはとりあえずタタシの母音交替と見たが、タツシのタツはタツ［立］の終止形、タチシのタチはタツ［立］〔四段〕の連用形でもあり、また、ヨクシ・ヨキシはとりあえずヨコシの母音交替と見たが、ヨクシのヨクはヨク［避］の終止形、ヨキシのヨキは同じく連用形でもある。右のようにとらえると、タツシ・タチシ、ヨクシ・ヨキシのような母音交替形が見える理由をよりよく説明できることになる。

ところで、ヨコ［横］が正しくない意に用いられる例について、これまでにいくつかの指摘がある。

前掲『金剛般若経集験記古訓考証稿』（辻氏担当部分）は、ヨコス［讒］を「悪口を言う、中傷する」意とし、「ヨコ（横）が、この語のように不正、邪悪を意味した例」として第五節に挙げた例の多くを挙げられ、次のように述べられる。

> ところで、漢字「横（略）」は平声ではタテヨコのヨコであるが、去声では「恣也、非理来」の意。つまり勝手気儘に振まって道理に合わぬことをする意である。従って、右のような不正の意のヨコは、或いは「横」という漢字の用法の影響によって生じたものかもしれない。

また、前掲『ことばの意味3（略）』の「タテ・ヨコ」は、「絶対用法」としての「タテ1〈垂直方向〉」「ヨコ1〈水平方向〉」に対して、「相対用法」としての「タテ2〈垂直な姿勢の話し手を基準にした前後方向〉」「ヨコ2〈水平な姿勢の話し手を基準にした左右方向〉」を考え、「ヨコには〈好ましくない行動〉という含みを持った比喩的用法が多い。」として、「ヨコ取りする。」「ヨコ槍を入れる。」「ヨコ車を押す。」「ヨコ恋慕。」「へたのヨコ好き。」「話をヨコにそらす。」の例を挙げ[30]（この他に「ヨコ紙破り」も挙げられよう）、次のように述べられる。

> これはおそらく、人間の進行方向がつねにタテ2であるために、タテ2が〈正常な方向〉というニュアンスを帯びてとらえられているためであろう。

そして、『岩波古語辞典』ヨコ［横］の項には次のようにある。

> 平面上の中心を、右または左にはずした所、また、その方向の意。また、タテ（垂直）に対して、水平の方向の意。転じて、意識的に中心点に当らないようにする、真実・事実をさける意から、「よこごと（中傷）」「よこしま（邪悪）」など、故意の不正の意にも用いた。

「絶対用法」のタテが「垂直方向」であるのは、タテ［縦］がタツ［立］とともにとらえられるからと考えられる。また、ヨコが正しくない意にも用いられるのは、〝蟹の横這い〟のような例を見ると「人間の進行方向がつねにタテ2である」こととの関係と言えるが、むしろ、まっすぐに行かず横によける（ヨク［避］）ところから、正しくない意にも用いられることになったものであろう。ヨコが正しくない意にも用いられることは、ヨコ［横］をヨク［避］とともにとらえることによってよく説くことができると言える。「漢字の用法の影響」もあるかもしれないが、基本は

和語の側にあるかと思われる。

なお、『岩波古語辞典』の言う「意識的に」「故意の」について、「〈好ましくない行動〉」（傍点、蜂矢）を表すところからするとそのようにも思われるが、「悪口を言う」意のヨコス［讒］などは確かにそのようでもあるものの、ヨコナマル［訛］などはむしろ自然と訛るのであって、ヨコ［横］の正しくない意のもの全体として「意識的」「故意」とするのは当たっていないと考えられる。

注

（1）［1982・5 平凡社（平凡社選書73）、のち2003・10 同（平凡社ライブラリー481）］

（2）「八〇年六月・國廣」と、執筆時期・執筆者が示される。

（3）『国語語彙史の研究』4［1983・5 和泉書院］

（4）［2001・6 くろしお出版］第2章、もと「〈物〉と〈場所〉の量の捉え方の統一的理解――〈形態〉と〈方向〉の連関――」（「国語学」181［1995・6］）

（5）「日本語学」3―3［1984・3］

（6）大坪氏㈠『石山寺本大智度論古点の国語学的研究』上［2005・7 風間書房、大坪併治著作集10］第一部第二章参照。同㈡「石山寺蔵大智度論加点経緯考」（「国語・国文」11―1［1941・1］）には「元慶元年」（877）とあるが、「天慶元年」（938）が正しいと見られる。『日本国語大辞典』（初版・第二版とも）は「天安二年」（858）とするが、誤りと見られる。

（7）［1972・1 角川書店］

（8）大坪氏㈠下が未刊のため、同㈡による。表記を通常のものに改めた。

（9）平城宮以北、東方のウワナベ古墳・コナベ古墳・磐之媛陵（佐紀ヒシアゲ古墳）・平城陵（市庭古墳、円墳形、平城宮造営時に前方後円墳の前方部が削られた、よって平城陵ではあり得ない）・神明野古墳（平城宮造営時に削られ現存せず）、西方の日葉酢媛陵（佐紀御陵山古墳）・成務陵（佐紀石塚山古墳）・称徳陵（佐紀高塚古墳）・神功皇后陵（五社神古墳）、などは、佐紀盾列古墳群と呼ばれる。

「皇后御年一百歳崩 葬㈡于狭城楯列陵㈠也」（記仲哀）・「皇太后崩㈡於稚櫻宮㈠（略）葬㈡狭城盾列陵㈠」（神功紀六十九年四月・十月）のように、神功皇后陵もサキノタタナミにあると記されている。その後、「世人相傳」では、「二楯列山陵」の南が神功皇后陵、北が成務陵であったが、神功皇后の祟りがあり、「捜㈡撿圖錄㈠」すると、それらは逆であったので改めたと、続日本後紀・承和十年四月の記事にある。

（10）別稿㈠「～キと～ギ」（「萬葉」150［1994・5］）参照。

（11）ヨコ［横］と対応するナム（四段）・［下二段］に対して、タテ［縦］と対応するのは、ツラナル「相（の）與迦（にムゼり）二 庫高原之上（に）」（上野淳一氏蔵漢書楊雄伝天暦二年点・大坪併治氏釈文）・ツラヌ「各自發引（タテフネヨ）」（石山寺蔵金剛波若経集験記平安初期点）と見られる。

（12）ヨコホルにはふれていないが、別稿㈠「対義語ヒロシ・セバシとその周辺」（「萬葉」104［1980・8］）参照。

（13）ヨコサノオホチと続けるべきところかと見られる。

（14）「末」字があるが、ヒタ、シと見ておくことにする。

（15）日本古典文学大系67『日本書紀』上の頭注に、「山の斜面で陽の当るのは南側、日かげになるのは北側なので、南を山陽、北を山陰という。カゲトモは、「カゲ（光）ッ（の）オモ（面）」の約で、日の光の当る方、つまり南方。ソトモは、「ソ（背）ッ（の）オモ（面）」の約でその反対、北方をさす。」とあることなど、参

照。

(16) 和名類聚抄には、「大路　唐韵云道路（略）南北曰阡（略）日本紀私記云多知之乃美知東西曰陌（略）同私記云与古之乃美知」（十巻本三）とある。

(17) アカラサマ・アカラシマは、急に、たちまちの意に用いられる。『上代編』アカラサマの項の「考」に、「アカラサマニは、アカラメと関係があり、またたきをする瞬間を意味することから、急に、の意となるといわれる。」とある。アカラメ「安加良米佐須如（シ）事久」（五十八詔・続紀天応元年）は、「目をちょっとよそへそらすこと。」（『上代編』）の意に用いられ、アカル［明・赤］「…ふほごもり赤れる嬢子〈阿伽例蘆塢等咩〉いざさかば良な」（応神紀・三五）ではなく、アカル［散］「外にして諸の人散レテ王子を覓（む）ルに、」（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春日政治氏釈文）とともにとらえられるかと見られる。散るように別れる意のアカル［散］は、目をよそへそらす意につながり、「目をちょっとよそへそらすこと」が「急に」の意になるならば、アカラサマ・アカラシマはアカル［散］とともにとらえられることになろう。『岩波古語辞典』アカラサマの項には、「アカラはアカレ（散）の古形。（略）（本来の居どころから）ちょっと離れて、あらぬ方へというのが原義。そこから、ついちょっととか、ちょっとかりそめになどの意に転じた」とある。

(18) 痛切である意のアカラシ［懇］「父母懇惻哭悲〈懇アカラ　惻ネタ（ミ）〉」（霊異記・上九・国会図書館本、興福寺本は〈懇阿可良之比天　惻美祢太〉）は、別語と見られる。

(19) サカ「堀江より水脈（みを）浜（さかのぼ）る〈美乎左香能保流〉梶の音の…」（萬四四六一）、カク「…斯くもがと〈迦久母賀登〉吾が見し子に…」（記応神・四二）、コト「則法界に異に（あら）ず［不］なりヌ。」（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春日政治氏釈文）の例が見える。アカル［散］の例は、注(17)に挙げた。

(20) 近世に下ると、イカサ「しかし伊之字のいかさハいやだ」（洒・富賀川拝見）の例は見えるが、名詞イカサマ「又いかさま國となんいへる所に至れば」（談・風流志道軒伝四）の略と見られる。

(21) イカ「…いかばかり〈伊加婆加利〉恋しくありけむ…」（萬八七五）、カリ「…旅の仮廬に〈多非乃加里保尓〉安く寝むかも」（萬四三四八・防人歌）の例が見える。

(22) アリ「…賢し女をありと聞かして〈阿理登岐加志弖〉…」（記神代・一一）の例が見える。

(23) 別稿㈢「カス型動詞の構成」（『吉井巌先生古稀記念論集日本古典の眺望』［1991・5 桜楓社］）参照。

(24) 別稿㈣「ヤカ型語幹とラカ型語幹」（『国語論究』7 中古語の研究［1998・12 明治書院］）参照。別稿㈤「ヤカ型語幹の構成」（「ことばとことのは」8［1991・12］）をも参照。

(25) 東京教育大学大学院中田教授ゼミナール編［1975・5 私家版］

(26) ナマル［訛］・タブ［訛］を含めて、この節の以下の例については、別稿㈥「日本霊異記訓釈「波リ天」考」（「訓点語と訓点資料」80［1988・6］）にふれたことがある。

(27) 別稿㈥に示すように、日本霊異記・上巻十九縁とも同話である。

(28) ヨク［避］は、この例によっては上二段動詞であることが確定できないが、キが乙類のヨキヂ［避道］「神の崎荒磯も見えず波立ちぬいづくゆ行かむ避き道はなしに〈与奇道者無荷〉」（萬一二二六）の例と合わせて、上二段動詞であることが確認できる。

(29) 有坂秀世氏「国語にあらはれる一種の母音交替について」（『国語音韻史の研究』［1944・7 明世堂書店、1957・10 増補新版 三省堂］、もと「音声の研究」4［1931・12］）参照。

(30) 作家立松和平の本名の姓は横松であり（立松和平の著書などの

絵を描く横松桃子（よこまつもも子）は娘）、横山（よこやま）ホット・ブラザーズの弟子に立山（たてやま）センター・オーバー（一九八五年、ＮＨＫ上方漫才コンテストで優秀賞二組の中に入った）がいる。ともにヨコからタテへの変化であるが、これらに影響関係があったとは考えられず、現代においてもヨコが正しくない意に用いられることからヨコをタテに変えたかとも思われる。尤も、現代語では、ヨコシマを別にすると、ヨコに正しくない意もあることはあまり意識されていないので、これは偶然の可能性もある。センター・オーバーが立山（たてやま）のある富山県の出身であれば事情は変わるが、センターは奈良県の、オーバーは大阪府の出身である。ただ、センターの趣味は登山だそうで、その辺に「立山」になる理由の一つがあるかもしれない。

なお、上座の意の〝横座（よこざ）〟は、ヨコが正しくない意とはむしろ逆のプラスの意味に用いられる例であるが、畳や敷物を横に敷くところからそのように言うものである。

―本学大学院教授―